

講題 「宿命を転じて使命に生きることを自由というこれを横超という」講師 田畑正久先生

巖松会館 受講記(赤間歎異抄の会 3月16日) 壱岐ミユキ記

現実をどう受けとめたらいいのかとリクエストがありましたので、私も現実の受けとめに苦労していますので、そのところを私なりの現況報告させていただこうと思います。

暁烏敏という方が「講義を聞きながら書きとどめるのをやめなさい。一時間の中で、どこかびっくりするような光みたいなものを感じることが大事なんだ。だから知識を増やすような聞法はやめなさい」といっています。そうだったのか、もしかすると私は一番最初、細川先生の講義を聞いたときの一瞬が光だったんだなあということをおもいます。

私が九大仏教青年部の活動をどうやって進めていったらいいかなあと思っていた時に、たまたま新聞のお誘い欄で福岡教育大仏教研究会の催しを見つけた。他の大学もこんなことしているのかと思い連絡先を聞いて訪ねて行った。

細川先生は、びっくりさせようと意図し訳けではないでしょうが、きっかけになればと思って話してくれたんだらうと思うけれど、「卵のたとえ」でした。知識として学んでいくと、それがびっくりの材料にならないでしょうが。

私たちは、卵の殻の中におよぶような存在なのだ。しかし私たちはそうは思わない。殻は、自己中心の分別という思考です。みんな幸せになりたいと善悪、損得、勝ち負けのそろばんをはじいて、プラスを上げてマイナスを下げていこうとする。それは卵が卵のままでおる状態では腐って、卵の死を迎えるしかない。卵は死ぬために生まれてきたのではない。

卵は親鳥に抱かれて親鳥から熱を受ける。仏教では熱を教えという。親鳥に相当するものはよき師よき友。教えに育てられて、ものを見る目、考える頭、食べる嘴、羽ばたく羽、歩む足ができて時期熟してヒヨコになる。ヒヨコになった状態を禅宗ではさとりといい、浄土教では信心をいただくという。ヒヨコになってみて、初めて大きな仏さまの世界があるとわかると同時に、自分が分別という殻の中にいたなあと知らされる。このヒヨコはさらに教えを聞きながら親鳥になる。これを仏さんになるということです。こういうお話です。

こういわれてびっくりしたのは、二十二年間の私の歩みをこの人はどこかで覗いて見とったんだらうかというくらいに自分の歩みをいい当てられました。そして、それが殻の中ですよというから私は殻の中におるなんて思ったこともないし。終わった後、質問の時間に「大きな世界に出てみたいんですけど」と質問したら、先生は「毎月一回していますから一年続けてみてください」といわれた。毎月福岡から通いました。一年過ぎたころ「まだよくわからないのですが、興味深い世界です」と感想をいいたら「田畑さん、三年続けたら分かりますよ」といわれた。それが五十年たちました。

ここで自分自身がお育てを頂かなくて殻を出るとかいう世界を考え出すことができるかな。自分で殻を出るといふ発想があるだろうか。多分百パーセントないでしょうね。一度殻を出るんだという世界があるということが、暁烏敏先生がいう一瞬の光だったのかなあ最近、暁烏敏先生の本を読んで思ったことです。分別で生きている人間に衝撃を与える世界だと思う。このさとりとか信心を頂くというところが非常に大事なわけです。

今日の講題は「宿命を転じて使命に生きることを自由という、これを横超という」これは住岡夜旻先生のお言葉です。この卵のたとえは今でもいろんな意味でなるほどだなあと思わしていただきます。宿命はどんなふうに考えるか。転じて使命、自由、横超。

宿というのは、仏さんの智慧によってみえてくる私の歴史。今受けとめている現実になってきた私の歴史という意味合いかなあ。仏さんの智慧によってみえてくるということが大事。仏さんの智慧というのは分別をこえた

無分別知の世界。

禅宗の言葉に「父母未生以前の本来の面目(お前の両親が生まれる前の、お前の本来の面目とはなんだ?)」とある。これは公案としてあって、夏目漱石もなかなか解けなかったと小説に書いている。あなたが生まれる前のあなたは何かというわけです。どう受け止めているかというわけです。それが無分別知の世界です。

私たちは生まれて大きくなる過程を経時的に考えてみると、私たちに分かるのは、両親がいっしょになって私がどこかで生まれた。そして四、五才ぐらいに自我意識(分別)が出てきた。そして成長して老病死がある。これが一つものの見方としてあります。

ここで仏教は、縁起の法ということを教える。私という存在はガンジス川の砂の数ほどのいろんな因や縁が和合してここに存在する。そしてそれが一刹那ごとに生まれては滅する。生まれては死に生まれては死に、医学的にいうならば代謝をくり返していつて存在するわけです。私が誕生するその前はどうかだったかという、何らかの形で遺伝子的にDNAとかRNAとか生命三十七億年の連鎖の中で、何らかの形で因縁和合、因縁和合を続けてきたと思われる。そしてたまたま両親を縁として私はここに生まれた。そしてここで死んだら何かわからんけど因縁和合の存在が続いていこう。

私が生まれる前の私は何かという、その時その時で因縁和合した私。それがいつの間にか外をながめて分別するようになってきて、分別のマイナス要因とバツ要因が私を苦しめ悩ますこととなります。仏教ではあなたが生まれる前の無分別でみた私のありようというものに気づいていくことが大事と言います。頭で考えると難しい。分別の私は、常にここに私がいてあれがいい、あれは好き、あれは敵だ、あれは味方だといつても分別しながら良いとこ取りをどンドンしていこうとするわけですが、必ず、そうした人々もみんな老病死という同じ形に終わるのです。この実生活の上いろんな現実が出てくる。この人生でいろんな現実に出くわしたときに、現実のマイナス要因、バツ要因が思い通りにならんという形で私を苦しめるが、これをどう受けとめていったらいいか。

私が仏教を学ぶとはこの迷いを超えるということ。超えるとは、仏さんの智慧の視点を頂くということ。無分別知の世界を生きている私になれば、私たちは今自分が問題に抱えているいろんな現実を超えていけるんですよというわけです。

超えていけるとはどういうことか。一年前「民族宗教と世界宗教」という形でお話しました。民族宗教というのは、私が幸せか不幸でないかは外の要因が決める。私の周りにプラス価値をいっぱい集めたら私は幸せということになる。大分県の宇佐神宮に参って「私をさとらせてください。信心をいただいでください」という人はいないでしょう。ほとんどの人は無病息災・家内安全・商売繁盛、願い事成就をお祈りする。私をとり巻く外の状況が私の幸不幸を決めるから、幸せにしてくださいとお祈りする。

ところが世界(普遍)宗教といわれるものは、外の状況をどう受け止めるかの意識、私の心の問題がより重要なのです。人間を苦しめるのは外の状況じゃなくて、その受けとめが問題になるのです。

無量寿経の中に、田があればあつたで、家があつたらあつたで悩む。無ければないで悩む。外の状況があつても無くても受けとめが人間の苦しみ悩みを起こす。ということは外の状況をどう受けとめるかという形の問題が、民族宗教から世界宗教、さとりとか、仏の智慧の受け止めが大事と言う世界に転じていった普遍性のある宗教なのです。外の状況をどう受けとめるかは、無分別の状態になれば私たちは受けとめられる。

どこが原因かという、意識の背後にひそむ煩惱。現実生活は分別思考なくては生きていけない。だからものがあつたときに、常に損得勝ち負け善悪を考える。そして私にとって損か得かといって、いつも煩惱に汚染された分別思考で考えていくということがあるから、なかなか無分別の世界なんて考えられない。そんなお

人好なこととはできないというわけです。仏教をいただけている人の生き様を見ると、底が抜けた感じというのがあります。底が抜けたというのは、まさに分別と同時に煩惱を抜けた感じなのですね。

私のところは田舎ですが、それなりに土地があったから三家族一緒に農業をしていました。私は大学一年のときに両親が交通事故で死んだわけです。その後私はおじさん、おばさんにおんぶに抱っこで育てられましたけれど、おじさんになる人は非常に人がよくて、その祖母になる人が非常に念仏をよるこぶ人だった。その子どもだからみんな温厚で色々地域の世話係をやっていた。今聞法している従妹が「私の父はいつも損な役ばかりしていた。もう少し自分のいいことを考えてすればいいのに損な役ばかりして」と親に不満をもっていた。でも仏法を勉強し始めたら「そうじゃなかったんだなあと見えるようになりました」と言っていました。

それぐらいお念仏いただくと底が抜けるような、損得がないわけではないが少ない。底が抜けるとはそんなことかなあという気がします。外から見たらお人好しのような、全てを受けとめてこれが私の引き受けるべき現実なむあみだぶつと言っていく。そういう生き方というのは無分別の世界。そうすると困ったなあというのは無いことはないが、これが私の引き受けるべき現実、なむあみだぶつとその時々、状況状況を引き受けていて外の状況の良い悪いに振り回されない。それを無分別の世界の生き様だろうと思うわけです。

そうするとそこにマイナス要因が色々あっても、それを受け止めて、その状況の中で自分が生かされているとか、支えられているとか、教えられているとか、願われているということが分かってくると、そのことで果たす私の役割があり、それが今私が果たす使命であり、それが私が今果たす仕事なのです。仏さんからいただいた仕事なのです。こういうふうを受け止められる転回が起こってくる。これ「宿命を転じて使命に生きる」。

私たちが生きるということを考えてみると今、かなり自由にやりたいことをしなさいと言いますが本当にやりたいことはあるのかなあ。私自身の経験でいったら、戦後日本人はみんな貧しかった。そして国民の8割ぐらいが農業に従事していた、農業はエンドレスの仕事ですからサラリーマンになりたいな。八時間働いたらあと十六時間は何もせんでいいのではなかろうかと思って農家を抜け出そうと勉強した。

母方のおじさんは、戦争の影響で青春をものすごく思うようにならないという形で生きてきていた。特攻隊には行って死に損ねて帰ってきて、それから人生やり直すわけですからね。そのおじさんがうちの母に工学部にいくより医学部にいったほうがいぞと言うから医学部ってどんなところか知らんけどなあ。医学部いこうかという形ですべり込んだわけです。だからあまり心がけがよくないわけです。何がしたいのかといっても、そこに欲に振り回された樂がしたいとか世間的なよからぬことを思いながら道を歩むものですから志がよくないわけです。私の自由は、苦しいのは嫌い、樂がしたいと煩惱まみれといえます。

私の病院へ、大腸癌が再発して疼痛治療を受けている人(73歳、男性)が入院してきた。その患者さんは食事にブランドのパンや銘柄の牛乳などを要求してくる。訳を聞いたら、癌が再発して先も短いから自分の自由にさせてくれということだった。

鈴木大拙は「肘は百八十度、外に曲がらん。これで自由だ、と言う意味が分かった」というわけです。我々はなかなか気づきません。肘は外には曲がらないという範囲内で物事を考えていかないと。自分の現実を正しく見て、頭の中で理想的に何でもできるみたいに思うのではなくて、自由ということ考えたときには現実の制限があった上で、自由という発想が出てくるというのです。

清沢満之の私の三部経の一つに『エピクテトスの語録』がある。エピクテトスは紀元五十年から百五十年ぐらいに生きた哲学者ですが、ローマ時代の奴隷の子どもとして生まれた。そして主人に可愛がられて勉強させてもらってストア学派の学者になって今日までその語録が残っている。

この人が「私は皇帝より自由だ」と言った。私たちからいったら奴隷の子どもでいろんな制限があつて身体

的に足も不自由だったらしいからその現実の中での自由は考えられないがエピクテトスは「自分でコントロールできないものを一生懸命コントロールしようとするのは知恵のないことだ。自分のコントロールできるところの中で自由に生きることが大事なのだ」という。この現実の受けとめ方。

私は小学校の頃、日本は資源が貧しいから資源を輸入して加工して国の経済をたてていくという加工貿易とかいう名前を覚えさせられたんですが、それを聞いた時に「しまった何で資源の貧しい日本に生まれたんだ、資源の豊富なアメリカに生まれたらきっと楽なのに」と思った。

農家でしたから田植え休み稲刈り休みは加勢をしないとイケなかった。駅の近くの商業しているところはみんな遊んでいる。「羨ましいなあ。自分はなんで農家に生まれたんだ」。

高校は今なら特急電車で十五分でいくところを当時は単線で通学に一時間くらいかかった。帰りは一つ手前の駅で二十分くらい停車する。「(高校のある)中津市に生まれとけばよかった」。

現実をいろいろ愚痴るのは愚かだという。

日本人が一億二千万人いたとしたらみんな違う業をもっている。それをいいとか悪いとか言ったらきりがない。恵まれた状況も大変な状況もあるかもしれない。これを等しい状態にしようといっても無理なことですよ。この現実をあれが悪いこれが悪いといって、おれは自由にやりたいのだと愚痴を言ってもね。

清沢満之は「天命に安んじて人事を尽くす」といわれた。「天命に安んじてとは、自分の与えられた場を天命を甘んじて受け取る、これを私の引き受ける現実としてそこで人事を尽くして生きるということが大事だといわれています。清沢は結核にかかって40歳前後で亡くなっています。東大を首席で卒業して、後に大谷大学の初代学長になったけれど、旧体制の中であっちにぶつかりこっちにぶつかり、思い通りに人生は進まなかったことが多いようですが、現実を受けとめ燃焼し尽して安心の中で亡くなっています。今頃四十歳で亡くなったら愚痴もいいところですよ。その中で天命に安んじて人事を尽くすというわけです。

私たち世間一般では「人事を尽くして天命をまつ」なんです。まず人事を尽くすところに焦点を当てるならば、人事を尽くして天命をまつということが本当に人事が尽くせるか。本当に人事が尽くせるというのは、天命に安んじて人事を尽くしたときに本当に精一杯完全燃焼の人生が生きられるのではないだろうか、と思われます。

自由というのは、もともと縁起の法、自分を取り巻く環境を良いとか悪いとか分別せずに、これが私の引き受けるべき現実、南無阿彌陀仏とお念仏で受け止めて、そこで精一杯尽くして、後は仏さんにおまかせしますという心意気でしょうか。今本がたくさん売れているという渡辺和子さん(カトリック修道女・元ノートルダム清心学園理事長)は「置かれた場所で咲きなさい」と、まさにそのことを言っています。これはいやだ、これはいやだとみんないうわけですけど置かれた場所で咲きなさいと。

念仏の人で河村とし子さんという人が山口県萩市の方におりました。その義理の両親の感化を受けました。おばあちゃんは小学校ぐらいしかいっていません。「ない物を欲しがらずに、あるものを喜ぼうよ」といつも口癖のように言っていた。私たちからいったら無いものが欲しい。そこに常識はずれとか現実の受け止めという姿勢が違います。

森本あんり(神学者・元東京女子大学長)が自由について、「我がまま勝手というのは感情やおもいの奴隷、囚われの姿だ。本人は自由だといっているかもしれないけれど、感情やおもいに囚われている姿です。隷属されている姿です」と書いている。そこに私たちがものごとの全体を、あるがままをあるがままにみるという形において自由ということが言われている。

私が昭和時代に生まれて大分県で育ち、今大分県で生きている。そしてある役割を演じている。これは私が中津の国立病院の外科の責任者をしていて、国東(くにさき)の方に移動の話が出た時に私は国東という

所はよく知らないから縁のある人はいなかった。国立病院でずっと生きていった方がいいのか、五ヶ町村でつづいている、一時は飛行場ができるまでは陸の孤島国東といわれていた国東とどっちがいいかなあとそろばんをはじくと、私にとって国東はマイナスのマイナスです。いきたくないと言った。そしたら一年たってまた大学が何とか行ってくれんかと。

細川先生に相談したら「田畑くん、大学がそんなにいうんだったら行ってみるか」と。私もつい男気で「はい」と。でも心の中はそろばんをはじいているわけです。そしたら先生からお手紙が来た。その一節は「あなたがしるべき場所で、しるべき役割を演じるということは、今までお育てをいただいたことに対する報恩行です」こういうお手紙をいただいた。これもまさに暁烏敏先生のいうように光ですね。エッ、人間になれていなかった。餓鬼だった。なまんだぶつ。

あなたは、あなたになされたご苦勞を知る心、私になされたご苦勞を知る心を「恩」というのだ。自分になされたご苦勞、いっぱいありますよね。そして社会から地域から学校から職場からいろんな経験やお育てをいただいて、あなたがまだ何か取ろう取ろうと餓鬼を生きとるんですかといって、人間になりなさいよ、仏教の学びをしっかりといきなさいよというお言葉として響いてくるわけです。

そこに自由ということを本当に教えらるようなお言葉だったなあとことを思わしていただきます。(前半)

講題「宿命を転じて使命に生きることを自由というこれを横超という」田畑正久先生

受講記(後半)(赤間歎異抄の会 3月16日) 宇山光成記

横超ということは、皆さん、聞法されている方は全部御存知だと思んですけど、まあ、一応念のために。

親鸞聖人が、私たちが、救われる救われ方を、「堅と横」、「超と出」で説明されています。「堅」は、順序次第に従って段階的に一つの方向に進もうとする方法をいいます。つまり、自力・聖道門の仏教です。「横」は、順序段階を経ずに一挙に最終目的を達成しようとする方法です。すなわち他力・浄土門の教えです。そして「堅」と「横」に、それぞれ「出」と「超」の二種があるとされています。「出」は、迷いによって生ずる苦悩からの脱出をはかって、やがてさとりのできに到達しようとする教えです。一方の「超」は、迷いの身のままに、一挙にさとりのできに達しようとする教えです。

これ「堅と横」と「超と出」の組み合わせ方なんですけど。あの、一步一步出ていくのを「出」る。一步一步出るで、ポンポンポンと、こう飛んで出ていくのを「超」える。で、堅方向というのは、一步一步学んでいくという形ですね。横というのは、一步一步いかずに、ポンと横さまに出てしまうと。

これを龍谷大学ではこんなふうにご教授しているんだそうです。一つの例です。

竹がありましてね。これ竹の節なんです。この竹の中にどういふ理由が分かりませんが、ある虫が閉じ込められたと。まあ、卵の殻の中に皆さん方は、いつの間にか居るはずがなかったのに、分別の卵の殻の中に閉じ込められて居たと。これを堤日出雄先生は、分別の牢獄に繋がれていると仰ってました。だから私たちは分別の牢獄の中に、いつの間にか入って居るといふ狭さがあるわけです。

だから分別で俺は広い世界に居ると言いたいんだけど、仏さんの智慧の眼で見ると、だから私たちが分別とか、そういう自分のことがよく分かるのは、それを超えた世界でないと分からないわけです。だから仏教の世界は細川先生は異質な世界と仰った。質を異にした世界だと。次元を超えた世界。そこから照らされて初めて自分が殻の中に居たなあと、分別の中に居たなあってことが分かるわけですから、何かいわゆる神秘

的なことを言っているのではなくて、気付いてみればそれの方が全体が見えているんじゃないかと知らされるわけです。

で、この分別という殻、この竹、殻としますね、そうすると、この虫の出方に殻から出る方向に、まず、堅方向というのは、これ、正統派なんです。

細川先生がよく資糧位、加行位、通達位、修習位、究竟位といって、唯識では段々向上的に一步一步こうなっていくと習いますよね。

それは、まず一つ目はこの虫が、ここから出るために、まず一回この竹の壁の中に入り込んで、そして、ここから一步一步一步一步、こう、堅(たて)に出て行って、切断された先端の面(竹の壁)からポンと出るのが堅方向に出るといふ方向です。堅方向に。今度は超えて出るというのは、この虫が、この節を、この節のところのここをポンと超えてシャット出る。だから壁の中をズーッと出るんじゃないで、ここの節のところをピョンピョンピョンと超えて出るから、堅方向にピョンピョンピョンと超えて出る、これが二つ目ですね。

一つ目に相当するのが法相宗というか、清水寺とか薬師寺とか法隆寺とかいう、ああいうところになされている唯識の仏教が、この法相宗は、この一步一步出るわけです。天台とか禅宗は、この二番目のこれだそうですね。堅方向に超えるんですね。これが二番目ですね。堅方向に超えるわけですね。そうすると、堅出(しゅつ)と堅超(しゅちよう)と言われてます。

次は壁を横断的に出る方向で一步一步出る。この組み合わせですね。これを三番目としますと、この一步一步横さまにというのは、この虫が出るのが、こっち側(横向きに最短距離真っ過ぐに)に出る場合と、横に直ぐ出ればよいのですが、ところが壁に入った後、丁寧に一旦この竹の壁に入ったものが竹の壁の中を、ぐるっと回って、一回りして出てくると。これが、お念仏を道具としてナンマンダブツ、ナンマンダブツ、ナンマンダブツと称えて、一所懸命修行して出る方向だといって、まあ自力と他力の混じった浄土宗的な形でしょうかね。お念仏を行として修行して出ると。

そして四番目の横さまに超えるっていうのが。真宗なんですけども。これ、どういふ出方かといひますとね。

細川先生が仏教では無我といわれているのに、往生浄土するというのは、何が浄土往生するんですかっていう質問があって、それに答えた内容をお聞きして説明しますと、私という存在は黒々とした墨みみたいな無明を生きている存在です。分別で狭い発想で煩惱に汚染されて黒々とした闇を生きている私たちに、仏さんの方が南無阿弥陀仏という方便法身の言葉になった仏さんが一歩前を歩くよき師よき友を通して、まあ、いうならば卵の殻の中に居る私たちに、このよき師よき友を通して南無阿弥陀仏、言葉の南無阿弥陀仏、仏さんが届けられて、無量光、無量寿とこう言いますが、無量光と、まあ、たとえでね、まあこれは、光です。これは、火みみたいなものだ。その南無阿弥陀仏が、お念仏は素晴らしいよと言って、諸仏称名といって、お念仏に遇った感動を私たちに讃嘆という形で教えてくれると。

そのお教を頂いていくと、元々私たちは私の患者さんもそうでしたけども、癌の人、癌で色々不安になっている人に、浄土真宗の門徒さんですから私が「先生、浄土真宗の学をお寺にいつてませんか」って言ったら中々行かない。「どういふかんのですか」と聞いたら、「女ばっかりじゃ」と言われて「それは、先生、女性の方が長生きするから、女性が多いのはいいじゃないですか。男であろうと女であろうと、お寺にいくの大事ですよ。南無阿弥陀のお寺にいつて、南無阿弥陀仏の心に触れるってことが大事なんですよ」ってこう言ったら、元中学校の数学の教師のこの先生は「わけの分からん南無阿弥陀だけは言いつてない」ってね。で私が「先生、浄土真宗の浄土という世界に触れるってことが大事なんです。浄土っていうのは仏さんの智慧がはたらいている場を浄土っていうんですよ。」って、こう言うと、次来られたときに、何と仰ったか。「世界地図で探

したけど、浄土はどこにもありませんでした」って。まあ非常に分別を依り所として、結局最後は入院して来られて、癌が進んでも「この病気はよくなるんじゃないか この病気はよくなるんじゃないか」って言われて、明るい方向しか見たくないんですね。そして亡くなっていかれました。まあ私にとっては、仏さん菩薩さんの、そういう生き様として私に見せて頂いたなあと思うんですけど。本人はやっぱり苦しかったかも知れなかったでしょうね。

で、このよき師よき友を通して南無阿弥陀仏の火が来ると、わけの分からん南無阿弥陀仏だけは言いたくないと言っていた私たちに、このよき師よき友が、こういう接点を持ってくると、その心に触れると、わけの分からん南無阿弥陀仏だけは言いたいという頑な心もいつの間にか、火が点くというわけです。火が点いて光を発するようになるというのは、わけの分からん南無阿弥陀仏と言っていた者がお念仏をする存在になったと。

大峯顕先生は、「私が南無阿弥陀仏になるんですよ」って言っていますね。「私が南無阿弥陀仏になるんですよ」ということは念仏する存在になったということかなあ。私が南無阿弥陀仏という存在になるんですよ。「あなた 小さな殻を出て、大きな世界を生きよ」という、この南無阿弥陀仏に触れて、この無我である私の何が往生浄土するのかといったら、このわけの分からん南無阿弥陀仏だけは言いたいという私が念仏する存在になったら、本願の船にね、乗せてくれて私を連れて行くって言うわけです。お浄土に。

ということは、出らなくてもいい、ここに居たらいいと。仏さんが連れて行ってくれると。これが正に横ざまに超えて、仏さんがいいようにしてくれる。「お任せします。南無阿弥陀仏」って心意気でしょうね。だから私たちは出ないといけな思ってたけど出なくてもいいと、仏さんがいいようにしてくれると。そういう心意気でいいかなあと思うんですね。この横超ということは。

そこで、この南無阿弥陀仏の心というのは、まあ、南無阿弥陀仏というのは『観無量寿経』に二箇所出てるだけですけども、その南無阿弥陀の心を表現しているのが『大無量寿経』ですから、この本願、四十八の本願の中でいろんな本願が説かれているんですが、十九願、二十願、十八願という展開で、そのお念仏に育てられていくわけですけども、このお念仏の心に触れるって言うことは、どういうふうにして私たちは、この心に触れて、この現実を受け止めて本当に自由自在に生きていく世界、『歎異抄』第七章には「念仏者は無碍の一道なり」と書かれている如くであります。

そういう無碍の一道を歩ましていただく私にどういってお育てでなっていくのかなあと言ったときに、ここの所、『大無量寿経』には、何が書かれているかといったら本願が書かれていますね。本願は何かというと法蔵菩薩の物語が書かれている。法蔵菩薩はあれは、まあ、お釈迦様の姿そのものに近いわけですね。法蔵菩薩の歩みを通して、この私は分別ばかりで生きていて、無分別の世界はなかなか分からない。そしてなかつ煩惱みれで仏法を聞く気もない。こういう私に何とか仏さんの智慧を届けたい、いのちを届けたいといって五劫の間、思惟をされて、そして南無阿弥陀仏という名前となって方便法身として、あなた達に智慧といのちを届けよう。そしてお念仏が選択本願、南無阿弥陀仏として説かれている。

これを延塚先生流に言うなら、「もう、あなた達に仏教の勉強をしようとか、修行しなさいとか、聞法してくださいなんて言うのは、もう諦めました」と。「私が南無阿弥陀仏になってあなたの信心となりましょう。あなたの中のお念仏になって、あなた達と一緒に歩んでいきましょう。」と言って、この本願が説かれているんだと。「もうあなた達にそんな立派になってもらおうとかもう諦めました」と。「私が身を捨ててあなたのお念仏になりましょう」と言って、このお念仏が届けられているんだと。

ここの所をですね、なかなか私は言う力がないんですけども、今日、用意した資料の一ページをちょっと読んでみましょうかね。

これは東京の「親鸞仏教センター」の本多弘之先生ですけども、『現代と親鸞』という本の中に次のように書

いておられました。これをちょっと味わいながら一緒に読んでいけたらなあと思います(同第二十二号 P261—262)。

「法蔵菩薩、我となる」。だから法蔵菩薩が私になってくれた。否、私の念仏になってくれたと。「『法蔵菩薩、我となる』と言っても、私には一切衆生を救いたいなどという願いは程遠い話である。」あの、『教行信証』、今、私の地元の大方の方で延塚先生に来ていただいて勉強会をしているんですけど「信巻」の「別序」の所に「自性唯心に沈む」という言葉があるんです。これは何かと言ったら、「己心の弥陀、唯心の浄土」という言葉があります。これはですね、私たちの身の中に、禪宗で言ったら仏性があるんだと、仏になる種があるんだと。これ禪宗の表現ですよ。そして浄土というのは、私の心に仏を憶う心の所に浄土があるんだと。こういう「己心の弥陀唯心の浄土」というのをはっきりさせるというのが、禪宗の方向ですとこう言っています。

私たちがお念仏の教を聞いていく中に、私の中に仏性があるとか、私の心に浄土があるというのは、黒々とした炭の中に、まあ、見えるという人もおるかもしれませんが、見えません。本当に黒々とした炭の中(無明)の私に、こんなものを認めることはできません。

「信巻」の「別序」には、「自性唯心に沈む」というのは、これに執われて、一生懸命自分の中に心の中に、仏性とか浄土を探そうとして、迷っていきと書いてあります。だけどよく考えてみたら禪宗的に行き着く先も「己心の弥陀唯心の浄土」。私たちも、お念仏を通して己心の弥陀唯心の浄土を頂くわけです。行き着いた所の味わいは、同じかもしれませんが。ただその方法が私に可能かどうかというのはまた別ですね。

だから「『法蔵菩薩、我となる』と言っても、私には一切衆生を救いたいなどという願いは程遠い話である。……けれども、そう思っているお前は本当のお前ではない。そのお前のもっと深みに本当のお前がいる。そのお前が叫んでいるのだ。それが法蔵菩薩なのだ。自分が自分だと思っている私は妄想我執の自分ではない」。これは分かりますよね。

「それは存在の本当の在り方ではない。でも、本当の在り方をいくら探していても、我執の立場ではどこにもない。仏性とか浄土が私の心にはどこにもない。どうしたらよいのだ。本当の自分があたかも外から来る如くに呼びかける」。

あなた 小さな殻をでて大きな世界を生きよ、とよき師よき友を通して南無阿弥陀仏が伝わってきて、

「外に居て呼びかけるのではないが、あたかもいるが如くに呼びかける。だから法蔵菩薩は他人ではない。あなたが思っている以上に、あなたの奥深くからあなたをどこまでも救いたいと呼びかけている願い。こういう願いが自分自身となって来るのだ。外にある願いだと思っていたけれども、それは本当は自分が思うよりも、もっと深く自分自身の願なのだ。この願に気付いたら、もうこの願から逃れることは出来ないのだ」と。

「曾我先生は『私の宿業というようなことはない。宿業の主語は法蔵菩薩である』(広瀬呆講義集第一巻 P195)と。だから私たちが仏さんの眼で見た自分の在りようが見えたというのは、絶対言えないんだと。これは仏さん、法蔵菩薩に見えた宿業だと。自分が宿業といって分かったような、ついでになりますよね。これは私たちはそれぐらい餓鬼根性がね、教えてもらったのも全部私が分かったんだと私の取りもの(私有化)にして道具にするわけです。本当についつい私たちは、そうなる感動がなくなるんですね。知識の一つになってしまうけど、常にピカッと光る光として響いてくるということが大事だと。知識の私有化は本当にマンネリ化して行くのです。

だから、「曾我先生は『私の宿業、宿命というようなものはない。宿業の主語は法蔵菩薩である』と。法蔵菩薩の目覚めの内容なんだと。

だから「『自身は現に是れ罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかた、常に没し常に流転して、出離の縁有ること

無し』と深き自覚を持っている主体が法蔵菩薩である」(同『選集』第六巻 P161)とされています。私たちは自分が分かったつもりになりますよね。この言葉を覚えると、これは法蔵菩薩の自覚なんだそうです。だから私たちは、いつも元の木阿弥で、もう分別の中で呼んでも響かなくなるわけです。でそれが分らん分からんと。否、驚かないといけないというわけですね。「宿業の主体は法蔵菩薩なのです。自我が宿業を知ることではないのです」。ないんだと。「宿業は法蔵菩薩の自覚なのです」と。

「法蔵菩薩は長い長い間迷い流転し続けて来た私と「安危を共同して」(善いことも悪いことも運命を共にして)、私の迷いを自らの迷いと責任を感じて、願い続けて今も永劫の修行のただ中におられるのです。宿業とは願いの我となって私と迷いの旅路を共にして下さった法蔵菩薩の眼に映った私が私にまでなった歴史なのです」。

だから宿というのは私が私にまでやってきた歴史なんだと。

「信心を『私たちの中に飛び込んで下さった法蔵菩薩の心』と物語的に言うならば、宿業は『信心の智慧によってのみ領くことが出来る私が私にまでやってきた歩み』、あるいは『信心の智慧によってはじめて明らかにうなずかれた事実の世界』と表現することが出来ましょう」。

広瀬果先生は「今日の私は、今日の私にまでなった歴史的な生命を生きているのであります。今日この私は今日の私にまで成った歴史的な生命を生きているのであります。この歴史のご苦労を『法蔵菩薩の修行』というわけです。私が私になった大地には、自我を超えた法蔵菩薩のご修行があるわけです」(同、講義集第一巻 P257)と。私が私になった大地、浄土ということ。浄土でしょうね。「その修行なくして今日の私はないのです。自我心から見れば、こんな人生はどうでもいいことになるかもしれません」。

だから自我心というのは仏さんの智慧を無視した分別と煩悩性の自我が見れば、こんな人生どうでもいいことになるかもしれませんが、仏さんの智慧で「信知されれば、この人生こそ法蔵菩薩の修行に支えられた公の人生であるのです。だからそれは一点も私有化することは許されないのです」と。

私が生かされているとか、支えられているとか教えられているとか分ってくれば、そこに必ずあなたが報恩行としてやる役割に目覚めるでしょう。気付くでしょう。それがあなたの今、果たす使命ですよ。否、それが今あなたがすべき仕事ですよ。

私たちは六道ということを知っていますよね。地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天。天というのはですね、自分の思いが叶った世界。分別とか煩悩まみれの私の思いが叶った世界なんですけども、天人五衰の中に退屈というのがあるんだそうです。退屈というのは何かと言ったら、所在がないというのは何となく自分の居り場がないという意味合いになるんです。それはどうしてかと言うと、もう見るべきものは見てしまったと。あと退屈だと。これはこれで救いようがない状態です。下の方のものが苦しんでいる時には、天を目指して頑張ろう、頑張ろうと言って動くわけです。ところが行き着いた所で迷い始めたら、もう行き場がないと。だから天から落ちる苦しみは地獄の苦しみの十六倍というわけです。私も二回そういうのを経験したんですけど。今日は話すのをやめときます。

宿業は法蔵菩薩の自覚といい、次の文章ね、宿業は信心の智慧によってのみ領くことができる私が私にまでなった歩みといいます。宿業は責任を引き受け、背負う力が与えられ超越があり宿業に随順するところに自然なる自由がある。それは法蔵菩薩の自覚であるから、そういうことは物語的に語るしかないのではないかと思うのです。

本多先生の文章をちょっと味わいながらですね、本当に、私たちが法蔵菩薩といって、何となく難しく中々分りずらい所ですね。そういう表現をされている、別の文章があります。資料の二ページ目に載せていますが、

これは「土曜会通信」に赤宗さんが、そのの所をちょっと味わいとして書いておられましたので、これもちょっと折角ですから読みたいと思います。

「法蔵菩薩とは私の中に飛び込んで下さって、私の迷いを自らの迷いと責任を感じて、我執の私の底を超えて願い続けて今も永劫の修行のまっただ中におられる真実の我、」ここですね。因縁和合して私があるという我。「南無阿弥陀仏なのです」。南無阿弥陀仏という存在なんだと。「その法蔵菩薩の自覚が『機の深信』なのです。」と。

私たちは機の深信という何か自分が自分で分かったと、つい思いがちですけど、これは私には分かることではない。仏さんの智慧を通してやっと見えてきた、「人間の『思い』が破られ、目覚めた者の絶対的な我が身の認識なのです。曾我先生は機の深信とは物語的に言えば、私の中に飛び込んで下さった法蔵菩薩の眼に映った私が身の歴史的現実、すなわち信心の智慧によって明らかになった『宿業の身』なのです」。宿命を受け止めたところも、これ宿業の身ですね。

「善導大師のいわゆる『機の深信』自身は現に是れ罪悪生死の凡夫、曠劫より已来(このかた)常に没し常に流転して、出離の縁あることなし』は宿業への目覚めです。聖人は、決定して『わが身は現に是れ罪悪生死の凡夫、曠劫より已来常に没し常に流転して、出離の縁あることなし』と深信すべしと命令形で表現されています。『自身』の自覚は人間の『思い』の中での認識ではない。自我意識の反省ではない。夢・妄想の中に迷う私を自己として永劫に願い続けて修行しておられる目覚めた法蔵菩薩の呼びかけと領解されているのでしよう。親鸞聖人においては法然上人のお念仏であった。私たちににとっては善知識の『南無阿弥陀仏』の教えを聞くことでしょう。自力が自力を破るということはありません。自力の破られたところ、自己の絶対の分限を知られたところ、自己には救いの手立てなしと両手を挙げたのが『機の深信』です。『自己に救いの手だてなし』とは『自力無効』と言うことです。それと共にさらに『機の深信』とは自力の心を捨てるということが不可能であると知られると思います。」と。

自力の心を捨てることが不可能なんだと。私たちはやっぱり分別でこの世を生きていくわけですから、もうこの世で生きている間は、もう捨てられないんです。

羽田信生先生は、「法蔵菩薩が能化(救う側)となるだけでなく、所化(救われる側)にもなろうと言われていたことは大切なことだと思います」といわれ、「法蔵菩薩が私たちの中に飛び込んで来て下さった」と表現されています。「如来が我となる」、「如来我となりて我を救いたもう」とは、本願は第十七願に本願の名号の廻向が誓われています。法の側、助ける側はもう準備OKなのです。そして第十八願はその本願の名号を領受することが誓われています。これは機の側の問題です。たすけるのは仏の仕事ですが、そのたすけを受けるといことは私達の仕事ですよ。ところがその私たちの仕事まで仏の仕事にしてあるのです。法蔵菩薩が私に寄り添って私の南無阿弥陀仏となって、私たちがお念仏によって救われていくんだと、こうおしえられているわけです。

やっぱり法蔵菩薩ということが、私たちが聞法していく中で法蔵菩薩をどういうふうを受け止めていくか、どういうふうに、納得していくかということが非常に大事なことだということが、ここで少し受け止められますよね。

私も五十年掛かって、やっとここに辿り着いたというか、もうちょっと早くからこういうふうを受け止めていたらと思います。しかし先生たちはもう、みんな言われておられていたけど、こっちが受け止めていなかったんですね。仏法の勉強をしていたら、もう死ぬ間際になって、やっと何か少し見えてきたなあなんて、思いながらも、本当に先生が世間の仕事は余力を残してやめなさいと言われて私も国東の今の市民病院の院長を十年して五十五歳で辞めたんですけど、その後ダラダラと、まあ中々世間の仕事なのか仏教の仕事なのか分らんとこ

るもあつたりしてやっているんですけども、やっぱりそういう道を先輩後輩が歩いて、「ああ、よく勉強されているなあ、ウワーほんとう、いろいろ教えてもらわないといかん」といってですね、本当に比較から言ったら、何かもうちょっと頑張らないといけなかったなあという後悔みたいなものがあるんですけど、でも後悔してもしょうがありませんので、比較を超えた世界であなたなりの人生を生きなさいと言われるわけですから最後の仕事ぐらいに思いながら少し取り組ませて頂き、歩いていけたらなあと思っているわけです。

そしたら私たちは信心を頂くということはどういうことなのかということですが。私たちはどうしても信心を頂いたら、もうその信心が続くみたいなのを思うわけですね。しかし世間生活をしていたら、信心なんか勤行の時ちょっと仏語を読んだ時とか仏書を読んだ時とか法話を聞いている時に何か仏さんに近付くような感じがするけど、あとの殆どは世間の中を生きていますよね。そうすると信心を頂くとはどういうことかなと思うわけです。

信楽先生が信心を頂くことは何かチッタ・プラサダといって清浄な眼で見えて物事が見えてくるということが智慧を頂くことだと。それは一瞬のことですと書いてあります。だから私たちはチッタ・プラサダといって澄んだ眼でいつも見るかっていうと見てないわけですね。しかしそれが見えたらね、ああ思い当たるなあ。あー、そこそ私が本当に願ってたことだったんだな。否、仏さんが言ってることが本当だな、とこう言って頷けるといいますかね。そういう意味では私たちも、これは私の誤解かもしれませんがね。信心についての誤解は何かと言ったら、もうずーっと仏さんの智慧でいくと思うわけですね。どうもそうじゃないみたいです。

だから常にリフレッシュされるような形で、生きる姿勢を正されて、お念仏の世界を受け止めて、歩まして頂いていくことなんだろうと思うわけです。

今回の講義もそうなんですけど、昨日の夜、準備をしながらね、十時ぐらいになって眠たくなってきて、しかし何か今日は準備が殆どできなかったなと思いつつ、もうしかし眠らないと頭が働きますからすぐ寝たんです。大体六時間ぐらいすると目が覚めますから、四時半ぐらいから目が覚めてちょっともう一回見直してみ、そこで思ったことはやっぱり先生との出遇い、師との出遇いですね。

だからやっぱり私が初めてここに来たときに卵の譬で「あなた殻なのよ。あなたの二十二年間は殻の中の世間じゃないの。それを超えた世界があるよ」といって驚かされた。そしていろいろありますけども、人生の節目の時に「あなたがしかるべき場所で、しかるべき役を演ずるってことは、今までお育て頂いたことの報恩行ですよ」と言われて、また生きる姿勢が正される。

先生方の讃嘆のお言葉をお聞かせ頂きながら、本当に遅々とした歩みをさせて頂きながら、やっぱり自分の人生の全体を見た時にやっぱり、浄土真宗の教えに遇って異質な世界から自分の在り様、生きざまを照らされて本当に、仏法に出遇わなかったら迷いっぱなしで、狂いっぱなしで、生きていったんじゃないかなあと本当に思いますね。否そうになっているわけです。そういう私がこう、生きる姿勢を正されながら最後にまだ学ぶべき教えを、さらに尋ねていきたいと、そういう意欲をですね起こさせて頂くのは、本当にやっぱり僧伽の中で育てられて、そしてそこで少し役割を頂きながら勉強させて頂くと。

私は先生から原典に当たりなさいっていうのは若い時から言われていたんです。もうずーっと逃げ回ってましてね、やっと光明団のズームを使った勉強会で、やっと今、『浄土論註』を細々と勉強させて頂いているんですけども、やっぱりそこに一緒に歩む人たちが、仲間がいて、そしてそこで刺激を受けながら、やっぱり自分一人で勉強するよりは、一緒に勉強しますとね、やっぱり「えーこんなふうには受け止めるのか。このように受け止められたんだなあ」とかね、やっぱりそういう学びをさせて頂くというか、自分から勉強しようなんていうのは世間的には少しは勉強するのかもしれませんが、仏教の勉強を自分でしようなんて言っても中々進みません。だけでも皆がやっているとか役割を頂くという形を通して、もう本当遅々とした歩みをさせて頂いております。

ゆくゆくは私、時々紹介してますけどね、三浦梅園っていう先生が、この先生は浄土教とは接点はなかったみたいですけど、禅宗のお寺には勉強に行っていたらしい。仏書をね。この先生が六十五歳後半に亡くなっているんですけど、最後にこういう書を残しているんですね。私が前任地、今の国東市民病院、そこで五ヶ町村で作っている今の国東の市民病院なんですけども、その病院のあるところの、国東半島の真ん中に両子山という七百メートルぐらいの山がありまして、その山懐に、麓に三浦梅園先生の旧宅があるわけです。この人が六十五歳すぎに亡くなっておられるんですが、その時に「人生恨むなかれ 人知るなきを 幽谷深山 華自ずから紅なり」ってね。私がそこに行った時にこの詩を見て、「私は私でよかった」という表現をされているなあ。私は私でよかったと。

で、清沢満之という先生が「天命に安んじて人事を尽くす」と。自分に与えられた環境の中でそこで精一杯完全燃焼して、あとはお任せしますと。私の役割を肅々と果たしてお任せしますって形で、生ききっていくという形を教えてくれているのかなあって。

大峯顕という大阪大学の哲学の教授をされていた先生がフィヒテという人の研究をされて、そのフィヒテという人は「死ぬ心配をする人は今を生きていない」と。いつ生きていいのか。「明日こそ楽になるぞ。明日こそ幸せになるぞ」と言いつつも明日を生きて今を生きていない。そうすると結局、終わってみれば空過流転になっていくんだと。

『論註』の中にうまくいかなかった人生じゃなくてうまくいった人生の人たちもみんな、世間的にうまくいった人たちの人生も、「夢中の患(患い)、遂に幻楽を生ず」みんな夢・幻の中のことになってしまうんだと。所在ないという形になってしまうんですよ。だから人生において世間的にうまくいっても、うまくいなくても。

あの、これを思うとね、今私たちは延塚先生のお話を聞いていますけども、延塚先生が田川でね、大学受験で大学と相性が合わんやっとな。二年目にもう一回お寺を抜け出そうと思って、仏教関係じゃない学校にいかしたら、いつも喧嘩ばかりしているお父さんが頭を下げて「たのむから大谷大学へいってくれ」と。「人生でうまくいってもうまくいなくても世間的に評価がうまくいってもうまくいかない人生でも、仏教が分らんかったらみんな生きたことにならんのだ」と。「仏教に出遇えさえすれば、どんなにうまくいった人生でも、うまくいかなかった人生であってもそれはそれで完全燃焼という形でいいんだ。だからたのむから大谷大学にいかってくれ」とたのまれてたまわっていったと。でもやっぱりそれぐらい言われるとね、やっぱり一歩前を歩く先生、親がそう言ってくれたことの凄さは成るほどなあと思わして頂きますね。私たちが本当にそこにそれぐらい南無阿彌陀仏の心に触れるということが本当に私たちが異質な世界からそういう智慧を頂いて私は私でよかったという歩みを確実にさせて頂くんですよということを思わせて頂きます。そういうことで、一応ひとまず私の今回の分は終わらせて頂きたいと思います。ご静聴ありがとうございました。(完)